

和歌山大学協働教育センター クリエプロジェクト
＜2018年度ミッション成果報告書＞

プロジェクト名：WAKA×YAMA

ミッション名：WAKA×YAMA SUMMER IDEATHON

ミッションメンバー：観光学部1年生植田晴香 観光学部1年生柏木美咲 観光学部1年生小林みなみ 観光学部1年生柴崎優衣 観光学部1年生森尾珠歩

キーワード：発達障害 発達障害の二次障害 社会課題解決 和歌山

1. 背景と目的

はじめに、私たち WAKA×YAMA は「若(WAKA)者のアイデアで病(YAMA)いをなくす」をモットーに、和歌山大学の学生をはじめとした他大学の学生たち(和歌山県立医科大学など)とともに、社会課題解決に取り組んでいる。私たちが掲げるモットーの「病い」を、1点目に「医療的な病い」、2点目に「社会的な病い」として定義づけて考えている。2点目の「社会的な病い」とは社会課題のことである。また、和歌山県は学生が活動をする上で、1点目に大学生が少なく学生間の繋がりが少ない、2点目に中高生の課外活動の種類、機会が少ないといった現状を抱えている。そこで WAKA×YAMA というプラットフォームを設けることで、大学生をはじめとした学生の活動の場を増やすことを目的としている。

私たちの活動の第1回目として「発達障害の二次障害」という社会課題に着目し、「発達障害」をテーマとして中高生向けのアイデアコンテスト、WAKA×YAMA SUMMER IDEATHON を開催した。イベント名の IDEATHON (アイデアソン) とは、アイデアとマラソンを掛け合わせた造語で、ある特定のテーマについて仲間と話し合い、考え抜いた結果生まれたアイデアを、それぞれのチームが発信し合うイベントのことである。本ミッションの背景として今、発達障害と診断される人が増えるとともに、発達障害者の進学率や就職率が上がっている。その一方で、社会にはまだ発達障害の正しい知識が浸透しておらず、不適切な対応により依存症や精神疾患などの二次障害が起こっているのが現状だ。発達障害は先天性の脳機能障害であり本人ではどうしようもできないものが多い。それに対し、二次障害は周囲の理解不足による後天的なものである。二次障害は社会を構成するひとりひとりの意識や態度の変化によってなくすことができる。発達障害のある人々が不必要に過大な生きづらさを抱えている現状はあってはならないと私たちは考えた。そのため「発達障害」というテーマを、私たち大学生をはじめとした若者が取り組むことで、社会の理解を促し二次障害を減らすことを目的とした取り組みをしようと考えた。そして、本ミッションをきっかけに「発達障害の二次障害」という社会的に解決できる課題を、若者をはじめとした多くの人に知ってもらうことを目標として活動した。

2. 活動内容

WAKA×YAMA SUMMER IDEATHON の概要として、「発達障害の二次障害で苦しむ人たちがどうすれば社会で生きやすくなるのかを中高生たちに考えてもらい、最終的にそのアイデアをプレゼンテーションしてもらう」と規定した。私たちが中高生を対象にした理由は3つある。1点目は、中高生の柔軟な発想や純粋な思いからくる原動力が社会課題解決に向いているからだ。2点目は、中高生にとって自分の人生や将来を見つめなおすきっかけとなるからだ。3点目は、若者が主体的に

課題解決することによって、社会的インパクトが大きくなるからである。また、私たち大学生はイベント企画、運営、中高生のメンターとして活動した。多くの中高生に参加してもらうために、和歌山市を中心とした中学校、高校に赴き、中高生たちに当イベントを宣伝した。また、私たち大学生では力不足の点があるので多くの大学や病院の先生から協力をさせていただけるよう取り組んだ。その結果、当イベントには23名（11チーム）もの中高生が県内外から集まった。11チームにそれぞれプロジェクトをサポートする大学生メンターがつき、チーム内外の交流、相談などの体制づくりをはかった。さらに中高生との連絡は、運営メンバー全員で共有するようにした。そして約1か月間にわたり、メンターは中高生たちに対しリマインド、モチベーションの向上などの支援を実施した。

私たちは6月からイベントに参加してくれる中高生の募集を始めた。そして、7月16日に決起会にて参加する中高生と運営メンバーの交流をした。その際、NPO 法人発達障害をもつ大人の会（DDAC）代表の広野ゆい氏を招き、発達障害者の生のお声を聞かせていただいた。また、研修医の寺本将行氏のワークショップでは、「楽しむ」という唯一のルールのもと、課題発見から解決策とプロトタイプの手作り方を学んだ。7月29日の中間報告会を行った。この日までに中高生たちは支援施設や相談施設をヒアリングして集めた情報をもとにその現状を分析し、各チームが課題設定に取り組んだ。参加者たちの素晴らしいアイデアのたねを見逃さず、もっと発想が広がるように大学生スタッフも全力でサポートした。報告会当日は、全チームに考えぬいたアイデアをプレゼンテーションしてもらった。その際、日本赤十字社和歌山医療センター精神科部長の東睦弘先生に現場で発達障害の課題にどのように取り組んできたのかを具体的にご講演いただいた。8月19日和歌山JAビルにてシンポジウムを行いました。各チームがこれまで考え抜いた珠玉のアイデアをプレゼンテーション、観客と審査員の評価で優勝、準優勝のチームを決定した。

<活動の様子>



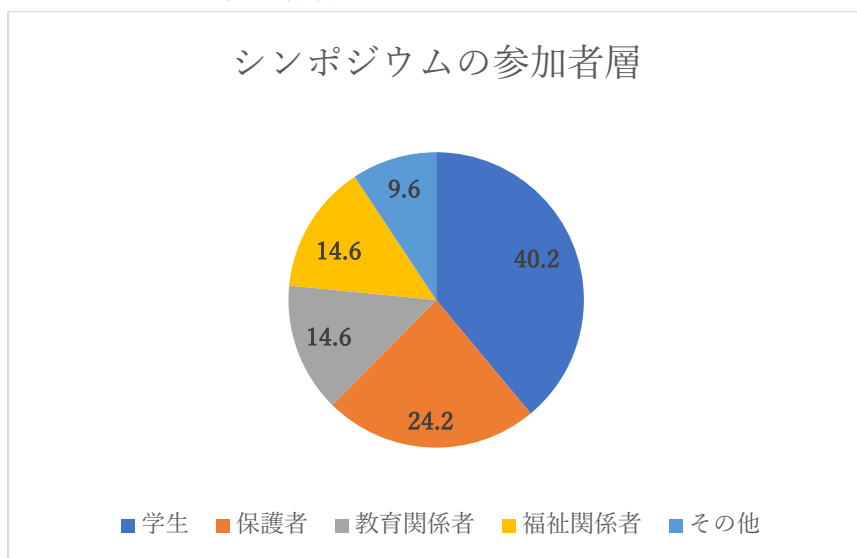
3. 活動の成果や学んだこと

WAKA×YAMA SUMMER IDEATHON のシンポジウムには総勢173名もの人が参加してくれた。イベント参加者からは「大変感銘を受け、感動しました。大人である自分たちにも、何ができるのか、考えていかねばと思います。」「着眼点もよく、和歌山でのイベントに多くの方々に集まったということについても、大変意義があったではと思います。」「若者が頑張れる、力を試せる場所、ぜひ継続して大きく育ててください。」といった意見をいただいた。当初に掲げていた目標の「社会の理解を促し二次障害を

減らすこと」、「社会的に解決できるこの課題を、若者をはじめとした多くの人に知ってもらうこと」に繋がったと考えられる。

本ミッションを通して私たちの成果として、1点目にイベント参加者の中高生が発達障害について実学で知ってもらい、課題解決のアイデアを考えてもらうことで、各チーム及び大学生スタッフひとりひとりが発達障害の二次障害を理解し、支援するきっかけを得ることができた。2点目に参加者がこのイベントを通して学んだことを第三者に伝えることで、第三者も発達障害を身近に感じ、改めて考えてもらうきっかけとなった。3点目に8月19日のシンポジウム当日のメディアインパクトにより、イベントに來ない無関心層にもアプローチし、発達障害の認知度を上げることができた。私たちはニュース和歌山、朝日新聞DIGITAL、毎日新聞、SankeiBiz、taliki、他合計10社に取り上げられた。また、私たちはこのようなイベントの運営に関わることは初めてであり、決して簡単なことではなかった。しかし、ひとりひとりが主体的に行動し、当イベントが想像以上の盛り上がりと反響をいただき、成功することができた。私たちはこの成功を誇りに思い、当イベントで培った経験を今後の活動に活かしていきたい。

<シンポジウムの参加者層>



4. 今後の展開

WAKA×YAMA SUMMER IDEATHONに参加してくれた中高生チームは約1ヶ月間の取り組みの中で、発達障害の課題をヒアリングでリサーチし、アイデアをブラッシュアップしていく中でクリティカルな解決策を提示してくれた。そのアイデアを実現するためにアクションをするチームや、会場にいた関係者とプロジェクトを進めていけるようにチャンスをつかんだチームもあり、彼ら彼女たちの活動を大学生スタッフたちで今後もサポートしていく予定となっている。

当イベントを開催するにあたって、私たち大学生だけでの発達障害の知識だけでは力不足の場面があった。この問題点に関しては、自ら発達障害についての大学の講義に参加する、当事者による講演会に赴くなどして積極的に知識を深めた。また、本学教育学部教授の武田鉄郎先生、和歌山県立医科大学保健看護部部長の岡本光代先生にサポートしていただいた。

5. まとめ

私たちは試行錯誤しながらも本ミッションをやり遂げることができたことが、メンバーひとりひとり本当に良い経験になった。また、当初掲げた目標もまた達成することができた。本ミッションによって発達障害者が二次障害を乗り越え、生きやすい社会へと一歩前進したにちがいない。しかし発達障害の二次障害がなくなったわけではない。これからも発達障害のイベント等に参加するなど、活動を継続していきたいと考えている。今後とも私たち WAKA×YAMA は「若者が病いをなくす」をモットーに社会解決するにいたって、誰もが生きやすい社会を実現していきたい。